

探偵くんと山田さん オーディオドラマ①・シナリオ
しりとり跡を濁さず

玩具堂

和の部屋

SE スマホの呼び出し音

和(N) (ナレーション) 学校が休みで用事もなく、ついでに天気も悪い午後。部屋で時間を持て余していると、不意にスマートフォンに着信があった。

和 誰だろう? ……ん、雨恵? なんか嫌な予感するけど、出るしかないか……

雨恵 (軽薄に) あ、戸村くん? あたしあたし。ほら、あたしだよ。

和 ……切るぞ。

雨恵 いや待って待って。短気だなー、カルシウム足りてる? シンヤモとか食べな。

和 シンヤモのシーズンは冬だろ……なんか用か? 連絡網……じゃないよな。

雨恵 うわ、出たよ、ぼっち特有のネガティブ思考……(しおらしく) あたしはただ、戸村クンの声が聞きたくなって――

和 ……小芝居はいいから早く用を言え。

雨恵 ちッ。用件というのはほかでもない、あたしは今から雪音と決闘をするわけなんだけど。

和 決闘……?

雪音 真面目に聞かなくていいですよ……

和 え、雪さん? スピーカーになってるのか。

雨恵 その通り。今あたしたちは、雪ちゃんの部屋で雪ちゃんのベッドの上に載せたスマホの前で顔を寄せ合っています。ふふっ、声にベッドのぬくもりが籠もってるようだろう? ……あ、イタッ、ほっぺたツネらないですよ雪。

雪音 変なこと言うからでしょ……

雨恵 あ、雪ちゃんさ、枕元にある本の作者の名字って、なんて読むの？

雪音 「あしべ」だけど……余計なことはいいから、さつさと話を進めなさい。

雨恵 あ、そうだそうだ。決闘するから審判してほしいんだよ。

和 だからなんだよ決闘って。

雨恵 お父さんが社員旅行のお土産で買ってきた銘菓「流山の里」の最後の一つを賭けて、雪音と勝負すんの。

和 そんなことで勝負を……？

雪音 要するにヒマなんだと思います……とはいえ、負けるつもりもありませんが。すでに雨の方が多く食べてますし。

雨恵 ラストワンは特別な一口なんだよ。というわけで、審判お願いね。どうせヒマでしょ。

和 ヒマで悪かったな……て言うか、しりとりでなにを審判するんだよ。

雨恵 ルールは簡単。使えるワードは三文字のみ。二文字でも四文字でもNG。ただし「きゃ」「きゅ」「きよ」とかは一文字の判定。一度出た言葉はどっちも使ってはいけない。そして返答は五秒以内。戸村くんは、そのチェックをしてよ。

和 ああ……まあいいけど。

雪音 お願いします。雨が相手だと、いい加減すぎてぐだぐだになりますから。

雨恵 ンじゃあ、さつさと始めようか。……いいかい、雪。この勝負が終わったら、争いを忘れて姉妹で末永く仲良くするんだよ。

雪音 はいはい……わたしが勝ったら、雨もいさぎよくお菓子を譲ってよ。

雨恵 (やや声をひきつらせて) そ、そりゃ、もちろん……先攻は、あたしでいい？

雪音 ん……？ まあ、いいけど。

和 (N)
「(モノログ) なんだろう? 雨恵の言動に、なにか違和感があるけど……まあヒマ潰しにはなるか。」

雨恵
「はい。じゃあ、ゲーム・スタート。最初のワードは……「スマホ」

雪音
「ホイル」

雨恵
「ルール」

雪音
「……ちよつとタイム。長音は一字というカウントでいいの?」

雨恵
「ちようおん? なにそれ。」

雪音
「あー……いわゆる伸ばし棒。「ゲーム」とか「ルール」とかの真ん中に入ってる。一字でいいんじゃないか?」

和
「じゃあ一字で。あ、語尾を伸ばす場合はノーカンでいいかな? 「ダンサー」とかの代わり、次の答えは「サ」で始まって「あ」で始まってもいい。」

和
「まあ……いいかな。どっちが有利になるわけでもないし。雪さんはどう?」

雪音
「かまいません。」

雨恵
「じゃあ、はい。「ルール」から続けて。」

雪音
「——「ルアー」

雨恵
「相手」

雪音
「手汗」

雨恵
「先祖」

雪音
「ぞ……憎悪」

雨
「お菓子」

雪音
「し……「シシヤモ」

雨恵 「モーター」

雪音 モー、た・あ……だから……「芦辺(あしべ)」

雨恵 「ベター」

雪音 「愛護」

雨恵 「ごめん」

(短めの、間)

雪音 え……あっさり「ん」が付いちちゃったよ。

雨恵 (しらじらしく) あー、そうだねー。こりやあたしの負けだー。うっかりうっかり。

和 (N) (モノローグ) モーター……ベター……ごめん……あつ、そういうことか！

雪音 あのねえ……せっかく無茶ぶりに付き合っただけだから、せめて真剣にやってよね。

和 あー……雪さん。

雪音 あ、ごめんなさい戸村くん。審判を頼んだのに、あつと言う間に終わってしまった。

和 いや……それは別にいいんだけど。雨恵の返した言葉で、「お菓子」の後からどう続いたか、覚えてる？

雪音 え？ はあ……「お菓子」、「(小声)ししやも」、「モーター」、「(小声)芦辺」、「ベター」、「(小声)愛護」、「ごめん」……ですか？

和 そう。それを、ノートでもスマホでもいいけど、平仮名に直して書き出して、続けて読んで見て。

雪音 は、はい……おかし・もーたー・べたー・ごめん。

雨恵 (乾いた笑い) あ、あはは……それじゃあ、お姉ちゃんは自分の部屋に帰ろうかな……

雪音 ——お菓子、もう食べた、ごめん!? ちょっと、待ちなさい雨！ 最後の一個、もう食べちゃったってことなの!?

雨恵 お、怒ンなし！ 勝負が終わったら争いは忘れるって約束でしょ。あたしもう謝ったから悪くないし！。

雪音 最初から、そんな姑息なことを考えてしりとり勝負を……！ いや、でも、どうやってわたしの答えを誘導して言いたいことを言ったの……？

雨恵 ああ、雪はほら、しりとりをする時、五十音順に単語を思い起こして答えてくるでしょ。だから予想するのはそんなに難しくもないんだよ。

和 言われてみれば、雪さんの答えは頭文字の後にア行が続くのが多かったな。でもって、「シシヤモ」や「あしべ」は、直前の会話で意識させておいたってわけか。回答時間が五秒しかないから、考えるより前に思い浮かぶ言葉があれば、それを使ってしまうから。

雨恵 正解。さすが探偵。

雪音 (怒りをにじませながら) 雨……あんたって子は、どうしてそういうくだらないことばかり頭を働かせるの……！ その小賢しさをもっと勉強に使えば、試験前に泣くこともないのに！

雨恵 ま、まあ、いいじゃん……なんだかんだ楽しかったでしょ、暗号しりとり。ねっ、戸村くん。

和 ん？ ああ……うん。まあ。

雪音 わたしはなんにも楽しくありません！

和 (感心したように) あー……

雪音 な、なんですか？

和 いや……雪さんて、家だとそんなテンションでキレルんだな、って。

雪音 くあっ…… (赤面して絶句) ……っくく、も、もう……もう……！

和 ……あ、電話切れた。ま……… (微笑んで) 家に籠もってたお陰で、ちよつと面白いものが聴けたかな。